■ ジェンダー研究センター年報　第２号（2022）pp.8-20

文化人類学からみるジェンダー:インドの事例から考える

菅野 美佐子

【要旨】

文化人類学におけるジェンダー研究は、植民地時代からの西洋と非西洋（東洋）の接触のもと、西洋社会では自明のものとされてきた男女の役割や規範、ジェンダー関係あり方が、世界の様々な地域社会で異なるという「発見」に端を発している。西洋の人々と異なる「東洋」のジェンダーのあり方は、サイードが「オリエンタリズム批判」を展開するなかで指摘するように、西洋の人々の目には「野蛮」、「奇異」、「エキゾチック」、「エロティック」なものとして映し出され、東洋に対する偏った思考を生み出していった。本稿では、文化相対主義の立場を取る文化人類学という学問が、こうした偏見にどのように向き合ってきたのかを論じる。また、インドの事例から、ジェンダーをめぐる諸課題とそれへの取り組みについて「オリエンタリズム批判」に立脚しながら考察する。

キーワード：オリエンタリズム、ポストコロニアリズム、フェミニズム、インド

はじめに

文化人類学は、世界の様々な地域の社会・文化的事象について、現地社会におけるフィールドワークを通じて情報を収集し、民族誌を記述しながら、事象の根底にある人々の思考様式や価値観などを解明する学問領域である。ある特定の社会における行動や慣習、価値観は、その社会の外部の人間にとっては、一見すると不可解に見えたり、野蛮で非合理的に見えることがある。しかしそれらを実践する人々にとっては、その地域社会の地理的・歴史的、あるいは政治的な事情によって生じた合理性が少なからず根底にある。人類学者は特定の地域社会に焦点を当て、そこに暮らす人々と長期的に時間をともに過ごし、言語を習得し、信頼関係を獲得しながら諸種の行為や思考の理由を解明する。その上で、文化相対主義の視点から、その社会に特有の文化現象の特定と、複数の地域社会に通底する汎用可能な社会文化理論の構築を行っている。

では、この学問領域からジェンダーを研究すると、どのようなことが見えてくるのだろうか？本稿では「オリエンタリズム」や「ポストコロニアリズム」など文化人類学ではお

馴染みの概念を取り入れながら、この学問におけるジェンダーの捉え方について論じていく。

人類学におけるジェンダー研究の登場

ここでは、まず、ジェンダーが人類学のなかでどのようにして注目されるようになったのかを見ていく。だがその前に、人類学が登場してから今日のような学問形態に至るまでの経緯を簡単にみておこう。人類学という学問の歴史は西洋による非西洋世界の植民地化の歴史とともにあると言ってよい。西洋の人々が、非西洋社会において自分達とは異なる容姿、言語、生活習慣を持った人々と遭遇したことは、人間（人類）に関して、生物学、言語学、哲学、人類学など様々な学問領域での関心を集める契機となった。人類学はこの時代に誕生した新しい学問であり、航海者や探検家たちが未開の地へと足を運び、現地の人々に関して収集した情報やデータを自国に持ち帰ると、人類学者たちが各地域の社会や文化の型をアーカイブ化し、分類し、分析し、理論化するようになった。このアーカイブや文化理論が植民地統治に利用されたことは言うまでもない。当初、冒険家や探検家によって収集された資料を研究材料としていた人類学者は、「アームチェアー（肘掛け椅子）の人類学者」と呼ばれた。しかし、次第に自ら現地社会へと出かけて、人々と接触し、調査をするようになり、現在の人類学の基本的な研究手法であるフィールドワークが確立した。

次に人類学においてジェンダーの視点がどのようにして取り入れられるようになったのかに視点を移したい。植民地時代に人類学者が対象とした「未開社会」で調査をするには、道の整備されていない険しい山やジャングルに分け入り、過酷な環境の中で長期的に滞在しなければならず、女性には困難だとされていた。したがって、当初の人類学者はそのほとんどが男性で占められていた。非西洋地域の多くの社会では男性と女性の空間が区別されており、男性は男性同士で、女性は女性同士で１日の大半を過ごす。このため、男性人類学者が見聞するのは「男の世界」であり、当時の民族誌で描かれたのは男性から見た偏った世界であったといえる。しかし、次第に女性人類学者が登場し、男性人類学者が描くことのできなかった民族誌が発表され、新たなジェンダー理論が構築されるようになる。その口火を切ったのが、20世紀半ばに活躍したアメリカの人類学者、マーガレット・ミード（1901-1978年）である。ミードは、「文化とパーソナリティ」の理論に立脚し、1925年から取り組み始めたニューギニア地域の３つの社会における調査研究を通じて、「男らしさ」や「女らしさ」は生物学的条件によって普遍的に決定づけられているのではなく、その地域の社会文化的条件によって規定されると主張した（ミード：1961）。それまでの人類学では、ほぼ全ての社会において男性が政治や経済、宗教において中心的な役割を担っているとされる一方、女性は出産や育児、家事など家庭での再生産活動と結び付けられ、これによって男性の優位性が通説となっていた。だが、ミードが調査した社会で

は、男性が繊細で臆病、かつ衣装や芸術に関心が高いという性格的特徴を示す一方、女性は頑固な気質で漁をして生計を担うなど、西洋社会で常識とされていた性別役割やイメージとは相反する状況が観察され、彼女はそこからジェンダーの文化決定論を導き出したのである。ミードの論文が発表されたことで、それまで生物学の観点から本質化されてきた「男らしさ」や「女らしさ」は、社会・文化的構築物であるという見方がなされるようになっていく。

ミードの議論が画期的であったにも関わらず、その後は、レヴィ＝ストロースの構造論が主流となり、男性の優位性が普遍的に位置づけられるという議論が展開された。社会構造論では、社会は総じて「文化／自然」、「合理性／非合理性」「強靭／脆弱」「男性／女性」といった二項対立的な概念で構造化されており、その構造内部で男女の関係も階層化され、男性は上位に置かれているという見解が示された。さらに、それを決定づけたのがシェリー・オートナーによる『男は文化で女は自然か？』（1987［原文 1974］）での議論である。オートナーは、男性を上位とする男女の序列構造は社会文化的に構築されたものと理解しつつも、①月経や出産、授乳など女性のみが経験可能な生殖行動が自然と結びつくことは避けられない事実であり、②それゆえに女性の役割が家庭という私的領域での再生産活動に限定されたり、③経血や分娩時の出血が不浄視されるなどの状況から女性が男性よりも劣位に置かれることが世界に共通してみられる普遍的事実であるとした。だがその後の多くの人類学研究では、女性の劣位性を示すジェンダー概念が見当たらない社会や、男性が生産活動、女性が再生産活動といった性別役割分業が必ずしも一致しない社会の事例が報告され[1]、ジェンダー役割の普遍性や画一性は否定され、文化的多様性が認められるようになっていった。

コロニアル時代におけるオリエンタリズムとジェンダー

植民地統治下における人類学的探究を通じて、非西洋社会のジェンダー関係や役割が明らかになったことは、西洋社会におけるジェンダー役割やイメージについて改めて見直すきっかけにもなっていった。当時の西洋社会ではキリスト教信仰のもと異性同士（ヘテロセクシャル）の一夫一婦制による婚姻形態が自明とされ、また啓蒙主義のもと、母性は女性特有の資質とみなされ、とくに産業革命以降は女性に育児や家事の役割を割り当てる、主婦化の動きが広まっていった（オークレー 1986）。他方、非西洋社会では一夫多妻制や一妻多夫制を取る地域や、女性同士の婚姻や死者と婚姻関係を結ぶ社会もあることが明らかにされた。さらに婚姻後の居住形態として、夫方居住や妻方居住、通い婚などの形態が取られていたり、相続形態には父系と母系に加えて双系制があるなど、西洋社会の固定観念をくつがえす事例が次々と報告されるようになる。西洋がこれらの多様性を目の当たりにすることで、ジェンダーをめぐる制度や役割規範は本質化された所与ものではなく、各社会において多様な形態で構築されているという考えが生まれた。

とはいえ、西洋社会においてジェンダー格差が社会文化的産物であり、それを生み出す社会を変革していくべきだというフェミニズム的な思想が誕生するのはもう少し後の話である。植民者たちは、被植民地社会で遭遇する、性器や乳房をあらわにし裸で生活する人々を無知で野蛮、淫らであると断定し、キリスト教の布教活動を通じて、禁欲的で恥じらいのある洗練された「西洋男女」の振る舞いを「教育」し始めた。例えば日本でも、江戸後期に開国を迫って来日した外国人は男女の混浴に驚き、破廉恥で不道徳であるとして外国人居留地での混浴を禁止した[2]。こうした「教育」や制度の「改正」を通じて、植民者たちは西洋の優越性を再帰的に内面化していったと考えられる。

その一方で、西洋の植民者たちは、「奇異」で「野蛮」だが「魅惑的」にも見える非西洋すなわち東洋の人々の慣習や規範、身体表象にエキゾチズム（時としてエロティシズム）を見出し、東洋を劣位に置きながらも、同時に未知の魅力的な世界観に憧れを抱くようになっていく。植民地の情景や人々を描いた数々の文学や芸術作品では、西洋人の目から見た「野蛮」で「エキゾチック」な東洋が描かれ、東洋を実際に見たことのない人々の間にもそのイメージが広がっていくようになる。パレスチナ系アメリカ人で文学者のエドワード・W・サイード（1935-2003年）は、このように西洋人による東洋に対する偏った表現やイメージがあたかも現実かつ事実であるかのように西洋社会に流通し、文学、言語学、政治学、哲学などに取り入れられてより権威を増し、広く受容されていたと指摘する（Said 1978）。サイードは、西洋（＝オクシデント）と、その対比的位置づけにある東洋（＝オリエント）との間の認識論的区別に基づいた思考様式を「オリエンタリズム」という概念で表し、その思考のあり方が、西洋が東洋を支配するためのレンズとして貢献したと批判している。オリエンタリズムのもと、ヨーロッパの人々には、東洋女性はエキゾチックでエロティックなイメージとして映し出された。例えばフランスで開花した「ジャポニズム」の絵画で、入浴する日本女性が定番のモチーフとなったり、旅行記や文学作品においてアラブ社会のハーレムや女奴隷が魅惑的に描かれるなどがそれにあたるだろう。サイードは、憧れとして東洋が描かれる場合にせよ、東洋の貧困や抑圧の状況の責任を西洋が負うと主張する場合にせよ、そこにはオリエンタリズム（西洋＝優位、東洋＝劣位）の視点が介在し続けると述べている。サイードのオリエンタリズム批判は、現地社会の人々に寄り添うべき人類学者にとっても、自らに内面化されたオリエンタリズム的思考を常に問い、自省的であり続けるために重要な視点となっている。

インドにおけるジェンダーとセクシュアリティ

このように、オリエンタリズムとは東洋の異質性を偏重的で過度に誇張されたイメージで捉えようとする思考のあり方であり、東洋を西洋の下に置くための統治技法として用いられていた。だが、植民地統治下においてこのようなオリエンタリズムの眼差しを逆手にとって、宗主国からの独立を果たした国がある。それは、筆者が長年研究対象としている

インドである。それでは、インドは植民地からの独立を果たすプロセスで、どのようなジェンダーの思想を打ち出したのか？またそれは、現在においていかに維持され、あるいはいかに変化しているのだろうか？本節からはインドの独立期から現在に至るまでのジェンダーをめぐる様相を見ていきたい。

インドを統治したイギリスは世界各地の植民地から調達した物資や人的資源をもとに自国の産業を発展させ、産業化、近代化を果たし世界を股に掛ける強大な大英帝国を築いていった。イギリスの植民地政府があったインドにおいて、イギリス人はヒンドゥー教の神々と多くの神話に基づく信仰体系にエキゾチズムやスピリチュアリティを見出していた。ヒンドゥー教の宗教的指導者で社会活動家のヴィヴェカーナンダ（1863-1902年）は、西洋人のオリエンタリズムを否定するのではなく、むしろ自らアメリカやヨーロッパでヒンドゥー教の精神文化を説いて周り、インドのスピリチュアリティを西洋社会に強烈に印象づけた。さらに、このインドのスピリチュアリティを、イギリスからの独立の士気を高めるために利用したのがガーンディー（1869-1948）である。当時、イギリス植民地政府による搾取や暴力的支配に不満を募らせたインド人たちは、独立国家の建国に向けて徐々に機運を高めていた。ガーンディーは、自国の近代性や合理性、物質的豊かさなどを強調するイギリスに対し、インドの伝統や悠久の歴史、精神的な豊かさを前面に押し出し、また、古代の書である『ヴェーダ』の教えに立ち返りながら、ヒンドゥー民族としてのアイデンティティ強化を通じて大衆を鼓舞しようとした。ガーンディーは、技術改良された銃や大砲などの武器を用いて暴力でインドを支配しようとするイギリス人は物質主義にまみれた野蛮な人々であり、それに対しインド人は崇高な精神をもっているとして、非暴力による独立を押し進めようとした。さらに、オリエンタリズム表象において描かれた西洋女性と東洋女性の対比とは真逆に、性的に自由で節操を欠いた西洋女性を提起し、それに対してインド女性は貞節で献身的で自己犠牲をいとわない自己統御できる高い精神を持つことを強調した（常田2011）[3]。一方、イギリスの支配に対抗するためには、インドなりの近代性や合理性を築き、技術革新や経済発展を推し進める必要もあった。そこで、独立改革者たちは、公的な場で近代的発展を担う役割を男性に割り当て、インドを守るために支配に屈しない強靭な男性になるというインド的マスキュリニティ（男性性）が形成されていく。他方で女性には、家庭という私的領域でヒンドゥーの伝統文化を守り、夫の近代化への貢献を支えながら、将来のインドを担う強く賢い息子を育てるという役割が割り当てられた。こうして植民地近代のなかで構築された二項対立的なジェンダー役割や、マスキュリニティやフェミニニティ（女性性）は、独立から75年を経た現在のインドにも息づいている。このように、植民地時代に形成された様々な制度や体制、イデオロギー、慣習などが植民地後も継続され維持されている状況をポストコロニアリズムという。

独立後のインドでは、ポストコロニアル的なジェンダー観念のもと、女性たちに厳しい規範が課されてきた。夫以外の男性には顔や体をむやみに晒してはならず、頭と顔はベールで覆い、外出は控え、男性との接触をできるだけ避けることが求められる（写真１）。女

性が人前で笑ったり、足をくんだり、壁にもたれかかることは娼婦を想起させ、はしたない行為とみなされている。初潮を迎え年頃となった少女はセクシュアリティが増幅し、男性を惑わす存在となるため、同じくセクシュアリティが増大して性欲の増した若い男性とあらぬ関係にならないよう、家族は、できるだけ早いうちに縁談を進める。ヒンドゥーのあいだでは同一カースト間での内婚制度が取られている。カースト・ヒエラルキーの上位の身分ほどその戒律は厳しく、異カースト間での結婚は家の名誉を傷つけるとされている。このため、大半の家庭では自由恋愛は強く禁じられており、婚姻は親の決めた相手とのあいだで執り行われる。結婚後は夫や義理の両親に従順に従い、彼らの世話を献身的に行い、女性は男児を産むことで嫁いだ家での地位を確保することができる。女性の献身性は、ヒンドゥー社会では妻、母として重要な資質とされており、ヒンドゥー教の断食日（ブラター）には水や食事を断ち、夫の安寧を神に祈る（写真２）。インドには女神信仰があり、ヒンドゥー教徒の間では、神話のなかで、夫のために勇敢に敵に立ち向かい、自らの命を捧げることもいとわない女神たちが寺院に祀られ、理想のヒンドゥー女性の象徴的存在として信奉されている。

写真１：寺院に参拝する女性たち。既婚女性はベールで顔を覆っている［2017年筆写撮影］

写真２：断食の日（ブラター）に寺院にて夫のために祈る女性。寺院にはシヴァの妻で、夫のために命を投げ出したパールヴァティ女神の神像も祀られている［2017年筆写撮影］

現代インドが抱えるジェンダー問題

女性をヒンドゥー女神になぞらえるインド社会では、女性は一見地位が高く、敬われているように思うかもしれない。たしかに、女性たちの純潔や貞節は崇高なものとみなされ、女性は家族男性が守るべき存在だと考えられている。また、女性がヒンドゥーの儀礼祭祀において重要な役割を果たしているという側面もある。しかし他方では、現代インドにおいて女性に対する暴力や差別に関連した事件は多発しており、インドでは国を挙げてジェンダー平等の実現に取り組んでいる。例えば、少女の早婚や児童婚、女児の間引きやネグレクト、婚前の異性交友を罰する名誉殺人[4]、結婚持参金[5]をめぐるハラスメントや殺人

などである[6]。とくに2000年代に入ってからは公共空間における女性への性的暴行事件がたびたび発生してはメディアをにぎわせるようになり、警察や行政はその対応に追われている。このようなインドが抱える「ジェンダー問題」については、独立以前から女性組織や社会団体などによって取り組みがなされており、現在も政府のみならず多数のＮＧＯが活動している。とくに1975年に国連で女子差別撤廃条約が締結され、女性の権利擁護や地位向上に対する世界からの関心が高まると、国際的な潮流に連動してインド国内でも女性のための政策が施行され始めた。1970年代に国際的に広まった開発パラダイムでは、それまでの開発事業から女性が排除されていることが問題視され、女性を中心とする開発の計画立案や実施を通じた女性の経済的地位向上の必要性が説かれるようになる。このとき提唱されたパラダイムを「開発における女性（Women in Development）」という。ところが、女性を開発に巻き込み収入を獲得できるようにしても、その社会における女性の地位は変わらず、むしろ家事や育児の他に経済活動という負担が増え、女性が自ら手にした収入も自由には使えないなどといった問題が明らかとなった。そこで次に登場したのが「ジェンダーと開発（Gender and Development）」とよばれるパラダイムである。1980年代に注目を集めたこのパラダイムでは、開発に男女双方を巻き込み、その社会における女性差別的な価値規範を見直し、ジェンダー平等に向けた意識変革の重要性が提起された。さらに1995年に北京で国連主導の世界女性会議が開催された際には、女性の社会的、経済的、政治的な地位の向上と現状の改善の重要性が議論され、教育、健康、経済、政治などあらゆる領域での包括的な女性のエンパワーメントの実現が主張された。

しかし、人類学的な視点からみると、これらのパラダイムにもいくつかの重要な問題がある。このことについて、以下で筆者のフィールド調査での経験から指摘したい。

筆者は2003年から女性のエンパワーメント実現を目指すＮＧＯ活動の調査を開始した。筆者の調査地は、北インドのガンジス川流域に位置するワーラーナシーという観光都市から車で小一時間ほど南に下った農村地帯である。北インドは、インドの中でもとくにジェンダー規範が厳格で、女性に対する差別や暴力の問題が深刻な地域である。そのため、主に貧困層の女性を対象とした政府系団体やＮＧＯの活動が各地で進められ、「女性のエンパワーメント（women's empowerment）」を掲げた教育支援や母子保健、職業訓練、小規模融資、暴力から避難するためのシェルターなど、様々なプログラムが実施されている。

この地域でＮＧＯ活動が始まったのは2000年のことであったが、農村住民の反発にあい活動は一旦中断され、2002年に再開された。住民の反発の原因は、「女性のエンパワーメント」という当該社会の女性規範やジェンダー観を撹乱する活動への拒否反応や、女性が活動に参加することで、炊事、洗濯、水汲み、掃除、家畜の世話、畑仕事、育児、家族の世話など、女性が担う膨大な役割がおろそかになることに懸念が生じたためである。ＮＧＯは各村落で月２回の集会に女性たちを招集するが、集会場へと向かう道の途中で、村の男性から揶揄されたり脅しなどの嫌がらせを受けることがあった。これによって自分の妻／嫁が家の外で辱めを受けたり、家の仕事がないがしろになることを心配する家族から引

き止められたりして、女性たちは集会のために容易に外出することができなくなった。

インドでは独立期から西洋式の教育を受けたエリート女性たちが、西洋社会で興隆した第一波・第二波フェミニズムの影響を受けて急進的な女性運動を展開してきた歴史がある。こうしたフェミニストたちが、その後に登場した国際的なジェンダー・パラダイムの影響のもとで創設したのがこのＮＧＯである。しかし、村落社会にジェンダー平等のための変革を起こそうと、突然プログラムを持ち込んだことが、かえって住民の怒りや嫌悪感を助長し、当事者である女性たちに恐怖や不安をもたらす結果となった。2002年の再開後のプログラムでは、ジェンダー変革を前面に押し出すのではなく、子どもの教育支援や母子保健向上のための活動など、福祉面からアプローチして成果を見えやすくするなどして、住民の信頼を獲得する努力が重ねられていた。女性を招集しての集会も再開されたが、プログラム参加者の女性たちも、集会を開催するＮＧＯ側の女性職員も、村人からの反発を買わないように細心の注意を払っていた。例えば、女性たちは、集会場所となる村の祠の前の空き地を使用する際には、祠の周りをきれいに掃除してから集会を開いていた。これは、村人から「女たちが私たちの祠を汚している」という批判の声が上がったことへの気配りであった。「汚している」というのは、物理的な汚れだけでなく、家の外に出歩いていることや、家事や育児といった女性の義務を無視して集会に参加するという当該社会の女性規範を逸脱する行為が、不道徳で汚らわしいという意味合いも含まれている。だからこそ、祠を清掃し清らかに保つというヒンドゥー女性の役割を示すことで集会への参加を多少なりとも正当化しようとしたと考えられる。また集会の間の女性たちの行動を観察していると、女性たちは時折席を立っては自宅へと向かい、またしばらくすると戻ってきたり、子どもを連れてきて集会場で面倒を見ていたり、編み物や縫い物をしながら話を聞いていたりと常に家事育児との両立にも気を配る様子が見られた。女性たちのこれらの行動から、集会への参加が女性の役割をおろそかにするものではないことを周囲に示そうとしていると考えられる。それは、女性たちがプログラムを長く継続させるために用いた彼女たちなりの戦略であったと言える（菅野 2021）。

国際的なジェンダー・パラダイムや西洋を中心とするフェミニズム運動では、男女の平等をよびかけ、インドのような発展途上国にも同様のジェンダー・イデオロギーに基づくプログラムを進めようとした。だが、以上の事例からも分かるとおり、その目論見は現地社会の価値規範や行動には必ずしも合致しない場合があり、それによって女性たちがかえって危険を感じる事態が生じることにもなる。こうした場面からも、西洋が構築してきたジェンダー・イデオロギーこそが進歩的であり、伝統に囚われた東洋の無力な女性たちを先導するという、西洋フェミニズムのヘゲモニックな使命感が見当違いな結果をもたらしたと考えることができる。

一方で、女性たちはプログラムに参加すること自体にはメリットを感じており、祠の清掃や「ながら参加」など、自らの方法でプログラムに参加しやすい環境を作り出そうとしていた。つまり、当該社会の女性たちは決して無力ではなく、プログラムを安全に継続す

る方策を自ら主体的に模索し、それを実践していた。その方法は男性優位社会への正面からの抵抗という西洋フェミニズムとは異なり、規範を遵守しているかに見せかけながら、その意味やルールを読み替え、自らの目的のために、わずかに外れた行動をとるという、ある意味でのローカルなフェミニズム実践と言えるかもしれない。そのようなわずかな実践を家父長社会で抑圧された非力な人々のなけなしの抵抗と位置づけるとしたら、それこそオリエンタリズム的な暴力となりうる。モーハンティー（2012）は、西洋フェミニストは第三世界の女性たちについて「依存的」で「従属的」といった画一化したジェンダー・イメージを生み出し、その彼女たちを啓蒙し導く西洋女性として自らを対置していると批判している。西洋で育まれたフェミニズム運動の優位性を自明のものとし、各社会の多様性を無視して均質化された運動を展開するやり方では状況を変えることは難しく、暴力的ですらある。このように、ジェンダー平等における「正しさ」を見誤らないように常に自省的な目を向けていくことが、人類学者の重要な役割であると言える。

インドのジェンダーをめぐる社会変容

上記の事例では、農村社会に外部から何らかの介入があった場合に、それを拒否したり、介入の意図や方法を読み替えたり、ずらしたりしながら受容する現地社会の人々の対応のあり方が示された。文化人類学者による民族誌には、自社会の価値規範とは異なるものと接触することで戸惑いや混乱が生じ、時として強い拒絶反応を引き起こすことが、これまでも描かれてきた。逆に、当事者にとって必要であったり、魅力に感じる文化や価値規範であれば、むしろ積極的に変容を受け入れる事例も多数見られる。近年のインド社会では、急速な経済成長やグローバル化、ＩＣＴの発達など様々な変化のなかで、新たな思考や行動様式への移行が進んでいる。若者のあいだでは、インターネットへのアクセスが容易になり、海外のドラマや映画などを視聴する機会が増えたことで、結婚前のラブロマンスへの関心が高まっている。90年代ごろまでは相手を知らないままに親や親族が決めた相手と結婚をすることが一般的であったが、現在では結婚前に数回デートをしたり、電話やオンラインで会話を交わして、互いに相手のことを知ってから結婚を決定するようになった。オンラインの婚活サイトが発達したことで、カースト内婚の規範を逸脱する心配もなく、未来の伴侶の選択肢も増えている。他方、女性の高等教育機関への進学率や就職率が高まり、結婚年齢は年々上昇している（Agrawal 2015）。また、結婚後も主婦として家事育児に専念する代わりにキャリアを求める女性も徐々に増加傾向にある。かつては結婚して嫁ぐと、実家に帰省するのは年に一度のことで、婚家で孤立する女性が多かったが、現在ではスマートフォンで、実家とビデオ通話で繋がりながら、寂しさを紛らわしたり、夫や義母の愚痴をこぼすこともできる。息子の誕生が重視され、男児が生まれるまで産み続けていた時代から、現在では娘と息子１人ずつが理想の子どもの性別志向という時代になっている。娘の教育レベルが上昇し、結婚の高齢化が進むとともに娘と親がともに過ごす時間

が増えたり、スマートフォンで実家と容易に繋がれるようになったこと、交通網の発達で実家と婚家の行き来がスムーズになっていることなどで、娘と親の関係が以前より強まっていることが要因の一つだと考えられる（菅野 2022）[7]。

さらに、若い女性たちの間でのジェンダー平等に関する意識も高まりつつある。例えば、欧米から始まったMeToo運動はインドでも女子学生を中心に展開され、オンライン上でジェンダーにまつわる様々な議論が交わされている。また、2012年に首都のデリーで女子大学生が集団強姦のすえに死亡した事件の後には、加害者の重刑と公共空間における女性の安全保障を求める運動が大々的に展開された。他方、経血が不浄であることを理由に、南インドのある寺院が10歳から50歳の女性たちの参拝を禁じてきたが、2006年ごろからこの寺院への女性の参拝の許可を求める訴訟が開始された。これにともない、ＳＮＳ上では「Happy Bleeding（幸せな出血）」と書かれた生理用ナプキンの写真を投稿する運動が展開された。2018年には、この寺院に女性の参拝を認める判決が下された。同じく2018年に妻のために生理用ナプキンを開発した男性の実話がボリウッド映画化され、アクション・ヒーローとして活躍する俳優が主役を演じて話題となった。このようにメディアやＩＣＴの発達は、インド社会に大きな影響をもたらしており、若い女性の異性に対する志向にも変化が及んでいる。ボリウッド映画では筋肉隆々でたくましい完全無欠の男性がセックスシンボルとして人気を博してきたが、近年では細身で甘いマスクをもち、勇気や強さもあるが優しい気配りのある男性像が魅力的に描かれるようになっている。さらに近年、とくに10代の若い少女たちのあいだでは、世界中で人気を博した韓国の男性アイドルグループＢＴＳなどK-POPグループの人気が高まり、「推し」に熱をあげるようになっている。

植民地時代にはオリエンタリズムのもとで西洋のジェンダー観が半ば強制力をもって画一的に導入されるという事象が起こった。だが、現代のグローバル社会においてジェンダー／セクシャリティをめぐる価値基準は、国内（地域内）では多様化し、世界的には均質化するという双方の現象が同時に経験される時代になっていると言えるかもしれない。

おわりに

以上見てきたように、文化人類学者は自身のフィールドでの経験を通じて、自らが身を置く社会で主流とされるジェンダー観とは異なる価値規範や行為実践に遭遇し、ジェンダー関係や役割がいかに多様であるかを、身をもって学ぶ。人類学の学問的基盤にある文化相対主義は、他の社会の文化や慣習、価値観などを尊重し、人類学者自身の価値基準ではなく、その社会独自の価値判断や合理性を探求する上で重要な視点となる。

他方、ジェンダーにまつわる制度や慣習などは、文化相対主義やオリエンタリズム批判という観点のみでは簡単には片付けられない事象も見られる。インドの事例でいえば、名誉殺人や児童婚、結婚持参金をめぐる女性への暴力などがこれにあたり、それがたとえ、その社会においては合理性を伴う慣習だとしても決して見過ごすことはできない。現地社

会と長きにわたって関係性を保ち、その社会とそこに属する人々を探求する人類学には、こうした事象に真摯に向き合い検討する責務があるだろう。同様に、近年のSDGsにもアジェンダとして盛り込まれるジェンダー平等であるが、事例でも示したとおり、西洋フェミニズムを中心に育まれた思想や活動をそのまま現地社会に持ち込むことで、女性への新たな暴力を生み出す可能性にも注意を払わなければならない。このように文化人類学とジェンダー／フェミニズムの関係は、文化相対主義と普遍的正義の拮抗した関係でもあり、これに携わる人類学者は双方の間で葛藤しつつ、着地点を常に検討し続けているのである。

【注】

1　例えば原ひろ子（1982）は、カナダのヘアー・インディアン社会において、女性は必ずしも自分の子を自分で育てないことを明らかにした。また、須藤健一（1989）は、ミクロネシアのサタワル社会において、女性は財産を管理したり処分する権利を持ち、夫婦間では、妻が夫と離婚を決定する権利を持つ事例を報告している。

2　こうした西洋人によるセクシュアリティの観念の強要が、そもそも乳房が性的な意味を持たなかった日本人が、羞恥心という感覚をもつきっかけとなった（村澤2020）。

3　この議論については、パルタ・チャタジーの論考が参考となる（Chatterjee 1989）。

4　おもに娘が親族や家族によって決められた相手との結婚に従わず、自由恋愛によって異性関係を持つことで、その家族の名誉は汚されたとみなされる。インドを含む南アジア社会やイスラーム社会では、当事者を殺害することで家族の名誉の挽回を図るという慣習があり、インドでは毎年名誉殺人関連の殺人事件が報告されている。

5　結婚持参金は、娘に対する財産分与の一形態である。ヒンドゥー社会では父系相続の慣習に基づき、息子への土地や財産の均分相続がなされるが、娘には婚出の際に財産の一部が渡される。しかし、独立後、その意味合いは大きく変化し、持参金の金額が娘の婚家での待遇に影響するようになっている。婿側から高額な持参金が要求され、支払えない場合に結婚後に女性が夫や義理の家族から嫌がらせや虐待を受けたり、自殺や殺人に至るケースも多い。インドの経済発展とともに持参金額が上昇しており、社会問題にもなっている。

6　国家犯罪記録局の2020年のデータによれば、警察に報告されている女性関連の犯罪事件は、結婚持参金関連の死亡事件が年間およそ7000件、レイプが２万8000件、夫や家族からの家庭内暴力は11万件となっている。そのほか、誘拐、強制結婚、人身売買、セクシャルハラスメント、アシッド（硫酸）・バイオレンスなどを含めると総計で37万件に及んでいる（NCRB 2020）

7　国家家族健康調査の2019-2021年のデータによると、男性1000人中の女性の人口が1020人となり、1992年の調査開始以来、初めて男性の人口より女性の人口が上回り、男女の性別比が逆転した（NFHS-5 2021）。前回の調査（2015-2016年）では、女性の人口が男性1000人あたり991人であった。人口に見るジェンダーバランスの観点からも、男児志向が緩和され、女児へ

の期待が高まっていることが推察できる。

【参考文献】

Agrawal, Anuja, “Cyber-matchmaking among Indians: Re-arranging marriage and doing ‘kin work Pages” in *South Asian Popular Culture* 13(1), pp.115-30, 2015.

Chatterjee, Partha, “The Nationalist Resolution of the Women’s Question” in Kumkum Sangari and Vaid Sudesh eds. *Recasting Women: Essays in Colonial History,* New Delhi: Kali for Women, pp.233-253, 1989.

Government of India, Ministry of Health and Welfare, *National Family Health Survey (NFHS-5) 2019-2021: India Report.* (http://rchiips.org/nfhs/NFHS-5Reports/NFHS-5_INDIA_REPORT.pdf)［2023年１月25日閲覧］

原ひろ子「ヘヤー・インディアンの女」綾部恒雄編『女の文化人類学：世界の女性はどう生きているか』弘文堂、pp.9-36, 1982年.

菅野美佐子「インド農村におけるSDGsとジェンダーをめぐる文化的位相：開発による変化からの日常の回復と持続」、関根久雄編『持続可能な開発における「文化」の居場所：「誰一人取り残さない」開発への応答』春風社、pp.261-284, 2021年

―「現代インドにおける家族およびジェンダー規範の変容」『現代インド・フォーラム2022年秋季号 No.55』pp.21-28.

Mead, Margaret. 1979. *Male and Female: A study of the sexes in a changing world.* William Morrow.

モーハンティー・Ｃ・Ｔ、堀田碧監訳『境界なきフェミニズム』法政大学出版局、2012年.

村澤 和多里「帝国主義のまなざしと近代的自我―「野蛮」をめぐるポリティクス―」『札幌学院大学心理学紀要 ２（２）』pp.19-30, 2020年.

National Crime Records Bureau, *Crime Against Women: Crime Head wise & States/UT wise 2020* (https://ncrb.gov.in/sites/default/files/crime_in_india_table_additional_table_chapter_reports/TABLE%203A.2.pdf)［2023年１月25日閲覧］.

オークレー・アン、岡島茅花訳『主婦の誕生』三省堂、1986年.

落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年.

オートナー・シェリー、山崎カヲル監訳『男は文化で女は自然か？』晶文社、1987年.

Said, W. Edward, *Orientalism,* New York: Pantheon Books, 1978.

須藤健一「ジェンダー・性・セクシュアリティ」合田濤編、『現代社会人類学』弘文堂、1989年

常田夕美子『ポストコロニアルを生きる―現代インド女性の行為主体性』世界思想社、2011年.

Gender in Cultural Anthropology
A Case Study of India

Misako Kannno

Gender studies in cultural anthropology started with “discoveries” made through the first contact between the West and the non-West (East) during the colonial period. Among those discoveries, they found that gender roles, norms, and gender relations, considered “self-evident” in Western societies, differed in other societies around the world. As Said criticized in his book “Orientalism,” gender-related practices, norms, and ideals of the East (Orient) differed from those of the West (Occident) and were perceived as “barbaric,” “odd,” “exotic,” and even “erotic” in the eyes of Westerners and gave rise to prejudiced thinking about the Orient. This paper discusses how the discipline of cultural anthropology, which takes a cultural relativism position, has approached these prejudices. It will also examine gender issues and efforts to tackle them from the perspective of the orientalist critique, by using the case of India.

Keywords: Orientalism, Post-colonialism, Feminism, India